

薩摩治郎八とパリ国際大学都市日本館（1）

ポール・クロードルの果たした役割

篠田 勝英

はじめに

パリ国際大学都市（Cité Internationale Universitaire de Paris, 以下「大学都市」と略記）はパリ市の南端に位置し、約40ヘクタールの広大な敷地（日比谷公園のおよそ2.5倍）に37の学寮が点在している。居住する学生・研究者の総数はおよそ5000人、ひとつの町とっていい規模である。実際、大学都市の内部には銀行もレストランも郵便局も劇場も診療所もある。もちろん町としては小さい。世界中に無数に存在し、近隣の住民にしか知られていない小さな町である。けれどもこのような町は世界にひとつしか存在しない。住民の国籍が百を超えるのである。その意味では、二十代が圧倒的に多いという年齢構成の点からも、オリンピックの選手村に似ているかもしれない。しかし開村してせいぜい一ヶ月で消滅してしまう選手村と異なり、大学都市は1925年創立、すなわちすでに80年以上の年月を閱しているのである。

その大学都市を構成する館のひとつに日本館（Maison du Japon）がある。大学都市のなかでは古参の館で、古い方から六番目、フランス政府直轄館をのぞく外国館としてはカナダ、ベルギー、アルゼンチンに続く四番目になる。創設は1929年（昭和4年）、薩摩館（Fondation Satsuma）という別名にみるように、明治の豪商薩摩商店の三代目薩摩治郎八が父治兵衛の援助を得て、パリ大学に寄贈した施設であることはよく知られている。しかしながら若き薩摩治郎八がどのような経緯でパリ大学と関わりを持ったのか、また当時の日本政府との間にどのようなやりとりがあったのか、こうした点について具体的な事情は十分には明らかにされていない。本稿では日本館創設にいたるまでの経緯と薩摩治郎八の演じた役割、また当時の駐日フランス大使ポール・クロードルとの関係について、現在参照できる限りの資料をもとに検証を試みる。

大学都市創設まで

大学都市最初の学寮が開館したのは1925年だが、そこにいたるまでにはかなり複雑な前史があった。それだけに大学都市自体の歴史記述は本稿の意図から離れすぎてしまうので、ここではその概略を、とくに大学都市の父とされるアンドレ・オノラ André HONNORAT（1868-1950）という人物に注目してたどっていきたい。

ヨーロッパ大陸の大学はそのほとんどが都市の内部で誕生し、したがってキャンパスという広大な空間を持たないのがふつうである。パリ大学もその例に漏れず、その施設のほとんどが中世

以来、現在のパリ五区のセーヌ河に近い一帯に集中し、いわゆるカルチエ・ラタンを構成していた。十九世紀後半のオスマン改革でセーヌ左岸にはサン＝ジェルマン、サン＝ミシェルという二本の直行する大通りができて、かなり交通の便は改善されたが、建造物が密集し、人口の集中する地区であることに変わりはなく、研究教育機関にふさわしい環境を模索する動きは早くから見られたようだ。1906年にはカルチエ・ラタンをパリ西郊のサン＝クルー Saint-Cloud に移す計画が具体化しかかったが、結局頓挫して欧州大戦を迎えてしまう。その後教育・研究施設をまとめて郊外に移す計画は立案されないままに半世紀ほどの時が流れ、1950年代以降ようやく自然科学系を中心に、研究機関・大学・グランド・ゼコールがあいついでパリ郊外（主として南部、西部）に移転を開始する時代を迎えるのだが、それに先立つ両大戦間に、学生・研究者の居住環境に関してひとつの興味深い動きがみられた。第一次大戦後、外国人学生数が著しく減少したのを受けて、留学生受け入れ態勢の整備として、パリ市外のプレシ＝ロバンソンに外国人学生宿舍を建設しようとするパリ市の案、パリの南およそ12キロに位置するソー公園に250ヘクタールの大学都市を作る案など、さまざまな提言が自治体レベル、国政レベルであいついで浮上したのだが、これらはいずれも実現にはいたらなかった。こうした計画のなかで、唯一実現の道をたどることができたのがパリ国際大学都市構想である。

1841年から1844年にかけてパリ市の周囲に建設された「ティエールの城壁」は、対プロシア戦争である程度の首都防衛機能を果たしたものの、砲撃に対してまったく無力であり、すでに1882年から撤去案が論じられていた。第一次大戦を経て、近代戦には無用の長物であることが明らかになり、1919年に取り壊しが決定され、以後跡地利用に関する議論が盛んになっていく。そしてとかく採算重視になりがちなこの種の議論のなかで、ある種理想主義的提案をしたのが、バス＝アルプ県選出の国民議会議員（のちに上院議員）アンドレ・オノラだった。

オノラは1919年に城壁跡地のうち最低20ヘクタールを「学生寮」建設のためにパリ大学の利用に供するよう提案し、同年4月19日に採択される。翌年ミュラン内閣の公教育相に就任した彼は、以後本格的に国際大学都市建設に取り組んでいくが、城壁跡地は一括して国からパリ市に払い下げられており、一方パリ大学は国立の教育施設であるため、跡地利用計画に大学の居住施設建設を盛り込むことは必ずしも円滑には進行しなかったと思われる。その間、別なところでひとつの出会いがあった。実業家エミール・ドイッチュ・ド・ラ・ムールト Émile Deutsch de la Meurthe（のちにシェル・フランスとなる石油会社の社長）とパリ大学総長に任命されたばかりの数学者ポール・アペル Paul Appell の出会いである。両者はともにアルザス出身ということ以外には共通点を持たなかったようだが、その出会いの結実は大きく、ドイッチュ・ド・ラ・ムールトは350人収容の学生寮を建設する費用として1000万フランの提供を申し出る。オノラはただちに彼と契約を結ぶ。着工までの期限が明記された契約だったために、用地問題がただちに焦眉の急となった。城壁跡地利用が確定するまでには紆余曲折があり、調整に時間がかかったが、1921年6月に81、82、83という番号を持つ稜堡 bastion を利用した大学都市建設のためのパリ市と国の間の協定に関する法案が議会を通過し、翌日の官報に公表される。これはドイッチュ・ド・ラ・ムールトとの契約期限の前日であったという。

一方、ドイッチュ・ド・ラ・ムールトが寄付を申し出たのと同じ頃、カナダ、スウェーデンからも同種の提案があり、これはのちにどちらもカナダ館（1926年開館）、スウェーデン館（1931

年開館）として実現する。ただしこれらの外国からの提案が、一方的に行なわれたものか、何らかの呼びかけに対して応えたものなのかはよく分からない。いずれにしても大学都市は、1923年から始まった城壁撤去の工事と並行して、ドイッチュ・ド・ラ・ムールトの名を冠した最初の学寮の建設が始まり、1925年の完成とともに本格的に機能するようになる。しかし皮肉なことに、エミール・ドイッチュ・ド・ラ・ムールト自身は1924年に亡くなり、自分の名前の館を見ることはなかった。

日本館建設構想

日本側に目を転じて、外務省外交史料館の所蔵資料を参照してみると、パリ国際大学都市に関する言及のもっとも古い例は、これまでの調査による限り、1921年（大正十年）の外交文書と思われる¹⁾。ただし日本館 Maison du Japon という表現はその前年1920年12月の「日佛文化協同参考案」という印刷物に見受けられる²⁾。これは杉山直治郎という人物が執筆したもので、そこには「第一期計画」として外国語教育の充実と日佛協會の役割の強調、「第二期計画」として「巴里ニ日佛文化協同ヲ目的トスル日本館（Maison du Japon）ヲ建設スルコト」と東京に七年制高等学校と大学を創設すること、という遠大な計画が1920年末の日佛協會日佛文化協同調査委員会で賛同を得たと記されている。

しかしここにいる「日本館」は、大学都市とはまったく結びつけられていない。アンドレ・オノラが乗り出したのは前述のように1919年頃なので、すでに大学都市構想は形をなしつつあったと思われるが、それとは完全に独立した形で、たとえば日本での日仏会館構想にタイアップする形で考えられたものかもしれないが、その半年後の資料とどのように関連づけられるのか、あるいは関連づけるべきではないのか、現時点では判断を保留せざるをえない。

さて1921年に話を進めよう。前記の大学都市に言及した最古の文書とは、同年5月26日付の石井菊次郎駐仏大使から内田康哉外務大臣宛の電報第801号であるが³⁾、これによれば、パリ大学総長「アッペル」は松田参事官と会見した際に、Emile Deutch氏（綴りの誤りは原文のまま）とパリ市の間で一億フラン（おそらく一千万フランの間違い）の寄附契約の結ばれたこと、カナダ、英国も自国学生のための施設を設ける計画のあること等を知らされ、さらに日本も参加したらどうかと「好意ヲ以テ勸奨」したという。前述のようにこの時点で大学都市の構想は十分には具体化していないが、このように国内ばかりではなく、諸外国への呼びかけが公式、非公式に行なわれていたと推測される。

この電報に引き続いて参照できる資料は、「巴里ニ於ケル日本人學生寄宿舎ノ建設」と「巴里大學寄宿舎構地内ニ本邦人留學生寄宿舎建設ノ案ニ關スル件」というふたつの文書であり⁴⁾、どちらも外務省の内部文書と思われる。筆者は松岡新一郎という人物で、当時外務省情報部第三部の嘱託であった。前者は1921年6月16日付け、後者は1921年7月13日付けで、アンドレ・オノラの名は出てこないが、「巴里大学總長ポール・アッペル氏」と「カノ有名ナルドウチエ・ド・ラモウルト氏」による大学都市構想を前提に、日本の方針を前向きの方で、かなり具体的に検討する内容のものである。仮に前記石井大使の電報801号が日本に大学都市構想を伝える最初の文書であるとすれば、受信後半月ほどでこれほどの情報を集めているのには驚くしかない。しかしそ

れ以前にパリからどのような情報がもたらされていたか、あるいは何も届いていなかったのか、具体的な資料はこれらの文書の周辺には存在しないようだ。

興味深いのは、松岡が、フランスの例に影響されたのか、この時点ですでに民間からの資金導入を考えていることである。日本館設立が民間人の手に委ねられたのは、関東大震災（1923年）による国家財政逼迫のためであるという説明がしばしばなされるが、政府は当初から民間をあてにしていたのかもしれない。また松岡新一郎が前者を執筆した二日後に、黒田清輝が外務省を訪れていることも注意を引く。『黒田清輝日記』の1921年6月18日の項には以下のような記述が見られる。

「六月十八日 土 雨 午前十一時頃外務省情報部ニ松岡新一郎君ヲ訪ネ巴里ニ學生寄宿舎設置ノ計畫ニ關スル意見ヲ交換セリ」⁵⁾

黒田清輝は曾我邦祐という人物とともに、日本館設立にあたって民間篤志家の援助を仰ぐために、準備委員会に加わることを求められていたようだが⁶⁾、その後どのような役割を果たしたかはよく分からない。いずれにしても、以後、在パリ日本大使館と外務省の間では、大学都市および日本人留学生宿泊施設に関するやりとりが急速に増えていく。パリ大学当局への打診もこの年に行なわれていて⁷⁾、具体化にはまだ時間がかかるが、大学都市建設への参加という方針は1921年にはほぼ固まっていたとみるべきだろう。ただし外交史料を見る限り、「日本學生會館」建設が、いつ、どのレベルで正式決定をみたのかは分からない。確かなのはこの時期に資金調達の模索が始まっていて、なおかつ民間資金導入の原則が確立したと思われることである。同年11月の文書には、大学都市に公金をもって邦人用寄宿舎を設けるのは、フランスだけを特別扱いすることになり実現が難しい、したがって民間資金をあてにすべきであるという考え方が明確に示されている⁸⁾。

翌1922年7月9日の讀賣新聞に「巴里に日本の大學町」という記事が出る⁹⁾。それによると摂政宮がソルボンヌ大学に寄附した3000フランを基金として、邦人留学生のために「立派な大學町を拵へる」計画が進行しつつあるとのことだが、「巴里の城跡に各國の留学生街の出来る計畫」への言及はあるものの、大学都市構想とは結びつけられていない。むしろ日本留學生後援會というものが組織され、活動を開始したことが主眼であるように感じられる。また記事の末尾に（ポール・）クロード大使が「同様の意味で」佛蘭西會館を日本に建設する計画を進めていることにも触れているが、この記事を書いたきっかけが何であったのか、具体的にどのような出来事があったのか、なぜこの日に掲載されたのかは判然としない。

以後1925年秋までの三年半ほどの期間、外交文書での大学都市、日本館構想への言及は激減する。大学都市最初の施設ドイッチュ・ド・ラ・ムールト館の定礎式を伝える仏蘭西の新聞の切り抜きが資料として保存されているが目立つ程度である。乏しい資料のなかで興味深いのは、1924年の始めに、在仏菊池大使から松井外相宛に、中村順平の日本館設計図を送付するという記録がみられることである¹⁰⁾。中村は裝飾美術學校 École des Arts décoratifs の学生で、卒業制作としてパリ国際大学都市日本館の設計図を提出している。これがどのようないきさつで、またどのような意図で制作されたのか、また制作時点で実現可能性があったのかどうかは未調査だが、大

使館経由で日本に送られているところを見ると、依頼されて制作したか、卒業制作として独自に構想したものが採用されたか、そのどちらかであろう。また中村の設計はおそらく大学都市内の具体的な敷地をもとにして行なわれている。現在の敷地よりかなり広がったと思われるのだが、翌1925年秋の資料によると¹¹⁾その土地は他に振り向けられ、中村案自体も廃案となっている。

薩摩治郎八の登場

前述のように、パリ国際大学都市への参加すなわち日本館の創設が、いつ、どのレベルで、誰のイニシアチヴで正式に決定されたのかはよく分らない。また薩摩家がどのようないきさつで、どの時点で資金負担を引き受けたのかも判然としない。外交史料館の文書をなるべく時系列に沿って（日付のない文書も時として保存されている）見ていくと、大正末年になって、「薩摩」という名前がちらほらし始めるのだが、日付の分かっている文書で最初に薩摩家との関連を感じさせるのは、1925年（大正14年）9月9日付の、幣原外相から在仏日本大使館の松島代理大使にあてた「電242號」である¹²⁾。外務大臣はこの公電で、パリの「大學町」（大学都市）に200万フランを限度として日本館を建設し、かつ維持費として100万フランを寄附しようという「特志家」がいるので、参考のために他館の建設費と維持費、またその出資者、運営の実態、さらに政府が関与している場合にはどの省庁が主管しているのか等々を、調査の上回電してほしい、と求めている。

ここで名前の伏せられている「特志家」は、提案だけ行なってその後手を引いた人物の存在が確認できるのでない限り、薩摩治郎八と考えてまず間違いはあるまい。ちなみに薩摩治郎八は前年12月13日にパリを発って帰国の途についているので、遅くとも1月中には到着したことになる。したがってこの電報がパリに送られたときは日本滞在中であり、10月からのアンリ・ジル＝マルシェックス（ピアニスト）の演奏会主催の準備に追われていた頃と考えることができる¹³⁾。

ただしこの「特志家」がみずから寄付を申し出たのか、あるいは依頼に応じたのか、そのあたりの事情は不明のまま、翌1926年3月にははっきりと薩摩の名前が出てくる。3月20日付の松島駐仏代理大使から幣原外相に宛てた公電¹⁴⁾には、「大學町総裁」（アンドレ・オノラ）と協議の上、参加各国の計画を見て、全体の調和を考えて敷地を割り当てるという方針で進める、そして「薩摩氏渡欧の機に」当地にて万事協議したいので、来欧の期日を回電ありたい、とある。その後在仏日本大使館と外務省の間の公電のやりとりのなかには薩摩の名がしばしば登場し、またこの年には廣田（弘毅）欧米局長と薩摩治郎八本人のやりとりが文書で残るようになる。4月19日付けで薩摩は、9月渡欧、実行に着手する旨、オノラ氏に伝えて差し支えない、と廣田局長に毛筆の書簡を送り¹⁵⁾、それを受けて幣原外相名で石井駐仏大使に、オノラ氏への伝言要請が打電されている¹⁶⁾。

この頃の日本側の計画では、およそ30室ほどの建物を考えていたらしい。それに対して大学都市本部からは、12月になってから大使館を通じて、30室では少なすぎる、60室は欲しいとの要望が伝えられる。これは石井駐仏大使から幣原外相への伝達だが¹⁷⁾、同時に建築家として「薩摩氏熟懇ノ間柄ナル」ビエール・サルドゥーを選任し、室内装飾を「之レ亦薩摩氏年来ノ友人」藤田嗣治に依頼するという方針がフランス側では確立しつつあることが確認できる。また年末にはや

はり石井大使から本省に宛てた報告で¹⁸⁾、「農業協會會館横の敷地」という最終的な用地の確定したことがうかがわれる。

以後、建設計画は順調に進捗したと思われ、翌1927年5月ないし6月に薩摩治兵衛、治郎八父子にレジオン・ドヌール勲章が授与され、10月12日にはいよいよ日本館定礎式が挙行されるのだが、ここでは薩摩治郎八が前記の「特志家」であるとして、そのような志を抱くにいったきかけを確認できるかどうか、当時の状況をもう少し詳しく見てみたい。

ポール・クロードルの役割

薩摩治郎八自身は日本館建設を財政面で全面的に支えることになったいきさつを次のように語っている。

「この事業〔ジル＝マルシェックスの演奏会〕も一段落付くと、その後更に一つの大事業が託された。と云うのは帝国政府が駐仏大使によって調印した巴里大学都市日本会館建設の実現策が私に相談されたことを指すので、この案を持って来たのは、元西園寺公望公秘書松岡新一郎で、外務省側は広田弘毅氏（当時欧米局長）であった。私は直ちに牧野伸顕伯の意見を求めに行ったところ、大賛成である。西園寺老公また大賛成、大いに鞭撻された。牧野伯からは特に佐分利公使（当時参事官）と合議の上事業を進めたがよかろうと親切な忠告まで受けた。いまだ二十五歳の私に、このような本邦最初の計画である国際的大文化事業の責任を委託された光栄は多とするが、さて資金調達には当時の日本では手も足も出ず、渋沢栄一子爵に相談の結果、我々父子が私力にて御引受けする事となってしまった¹⁹⁾」

これを見る限り、薩摩家は日本政府の要請を受けて、資金拠出に踏み切った、と見るのが適当であろう。一方、その際に当時駐日フランス大使であった詩人・劇作家ポール・クロードルの影響、とくにクロードルと澁澤栄一の尽力で実現した日佛會館創設の影響があったとみる捉え方がある。東京の日仏会館設立におけるクロードルの貢献を検証した論文で、中條忍氏は1926年10月1日付のクロードル大使から本国の外務大臣宛に送られた「報告書」を紹介して次のように述べる。

「駐米大使として日本を去る4ヶ月前、クロードルは大使館の一等書記官であったモランに薩摩治郎八を紹介されている。10月1日の本省宛の報告書によると、薩摩治郎八はクロードルによって建てられた日仏会館に心を打たれ、フランスに同様の施設をつくりたいと言ってきたのだ。それは、フランス語、フランス文化を学びに行く研究者と学生のための宿泊・研究施設だというのである²⁰⁾」

中條氏は慎重に断定を避け、薩摩がクロードルに直接的な影響を受けたか否かという点には触れず、日佛會館の存在に感銘を受けた、と述べるにとどめているが、これは広い意味でクロードルの影響とっていいだろう。

さて同氏に見せていただいた上記報告書のマイクロフィルムのプリントアウトをもとに、2006年9月に、フランス外務省史料室（Archives du Ministère des Affaires Étrangères, 略称 AMAE）で、この「報告書」の分類のされ方、前後の書類、オリジナルの調査を試みたが、残念ながらパリの外務省内に保存されているのはマイクロフィルムのみで、文書のオリジナルは目にする事ができなかった（外交文書の多くはナントにある AMAE 分室に保管されているようである）。当該文書は大分類が E 系列アジア・オセアニア 1918-1940、文書目録 E 系列アジア、下位系列日本、その 583-1 という一連の文書のなかにある。なぜか文書に記された年代の上三桁が消され、6 という数字だけが残っているが、前後の事情から 1926 年のものであることは確実である。宛先は外務大臣、差出人は在東京フランス大使ポール・クロードル、31 番の番号が付き、「薩摩氏と日仏の知的接近」という要約的タイトルが付されている。文面は以下の通りである。

「1924年12月23日付本職宛書簡で、モラン氏は若き日本人薩摩氏を私に紹介してくださいました。長期のフランス滞在の後に日本に帰国し、我が国の知的影響の推進に尽力するのに意欲的な人物であります。

事実薩摩氏は翌年の秋から、著名なピアニスト、ジル＝マルシェックス氏を日本に招聘いたしました。そしてジル＝マルシェックス氏は三ヶ月近くにわたって日本の聴衆をフランス近代音楽に親しませるのに大なる成功を収めたのです。

ついで本年三月には、大臣閣下宛当方書簡12号に記したように、またしても薩摩氏は医学アカデミー事務総長アシャール教授に懇篤なる接遇をなしたのでした。同教授は家具什器類の不足により、日仏会館に宿泊することがかなわなかったのであります。

その薩摩氏は、少なからぬ資産を享受する身であります。先般パリに向けて旅立ち、彼の地に長期滞在する心算と仄聞しております。

東京日仏会館の順調な滑り出しに、同氏は深く打たれ、パリに同種の施設を創設せんとする着想を得ました。当面、氏の計画は確定には至っておりません。日仏会館のような教授・居住研究員用の施設を設けるか、あるいはパリ市の土地提供を受けて、モンスリー公園に隣接の用地に日本学生会館を建設するか、方針は決定をみていないのです。

しかしながら薩摩氏には財政面で多大の貢献をする準備があると見受けられます。パリにおいて氏はオノラ氏と連絡を取ることでしょう。同氏を支援するに如くはないと考える次第です」

本文中の1924年暮れのモランの書簡、クロードルの1926年3月の本国外相宛書簡12号は、パリの AMAE で調査したが、583-1 という分類のなかには発見できなかった。したがってコンテキストがいささか分かりにくくなるのだが、はたして薩摩治郎八はクロードルと直接会って、その影響で東京の日仏会館に対応する施設をパリに作ろうという着想を得たのであろうか。また両者は実際に顔を合わせる機会があったのだろうか。クロードルの駐日大使としての任期と所在、同じ時期の薩摩の所在を照らし合わせてみよう。ここでクロードルの所在を問題にするのは、彼が任期中東京に常駐してはいなかったからである。

1921年（大正10年）11月19日に横浜に着いたクロードルは1927年（昭和2年）2月17日に駐米

大使としてアメリカに向けて出発するまで、5年3ヶ月にわたって駐日フランス大使の職にあったが、その間、1925年（大正14年）1月22日から翌年2月27日まで、約13ヶ月を休暇としてフランスで過ごし、東京には不在であった。一方1921年頃ロンドンからパリに居を移した薩摩治郎八は、1924年12月13日にパリを発って帰国の途に着く。経路、帰国日は不明だが、おそらくル・アーヴルかマルセイユからの海路であろうから、陸路の部分も考慮すると、年内の帰国は不可能であろう。クローデルがモラン氏から受け取った書簡は12月23日付であるが、その日の前後に薩摩は帰国の途上にあると考えた方がいいだろう。また文面にあるようにクローデルの受け取ったのが「書簡」であるならば、よほど特殊なルートでない限り（あるいは公電でない限り）、薩摩の帰国に大きく先んじてこれを受け取ることは困難であったろう。以上を考慮すると、1925年初頭と考えられる薩摩の帰国と、1月22日のクローデルの出発までの間に、まだ会ったことのない両者が会見した可能性はまずないと思われる。

さてクローデルとすれ違った薩摩は、東京で、今回の帰国の主要な目的であるアンリ・ジル＝マルシェックス連続演奏会を10月から11月にかけて主催する²¹⁾。そして公演が好評であったためか、12月半ばまで国内各地で演奏会が催された。その間、9月に前記「特志家」の申し出があったわけだが、これが薩摩治郎八ないし父親治兵衛であったかどうかの確認は今のところできない。明らかなのは前述のように1926年3月20日には薩摩家が日本館建設の費用負担を引き受けることが確定していることだけであるが、それがどの時点で行なわれたのかは、外交文書を追うかぎりでは限定できないのである。3月20日といえば、クローデルが東京に戻ってから3週間ほどである。しかもこの間薩摩治郎八はおそらくかなり多忙であったと思われる。山田千代との縁談が進み、3月13日に挙式の日を迎えているし、またこの時期に、外国滞在中で徴兵検査を受けていなかった代わりの志願入隊（三ヶ月とされる）を果たしていたからである²²⁾。

以上の点を考慮すると、クローデルと薩摩治郎八は、薩摩家が日本館建設を財政面で全面的に支えることが決まる前に、直接面談する機会があったとは考えにくいのである。もちろん治郎八が千代夫人を伴ってパリに戻るのはその年8月だから、出発までにクローデルと会う機会は十分にある。前記「報告書」の文面からも、クローデルが治郎八に会ったのは確実であろうと感じられる。そのような機会には当然大学都市のことは話題に出るであろうし、クローデルと澁澤栄一の尽力で開館した日佛會館（1924年12月14日）と対になるべき日本館という理念も語られたことだろう。しかしそのときには薩摩家の費用負担は既定の方針となっていたのだから、日佛會館の存在自体に感銘を受けることはあっても、クローデルの直接的な影響を受けて、日本館建設に乗り出したのではないと思われる。クローデルに激励され、その言葉に鼓舞されたことは大いに考えられるが、しかしこれは治郎八にとって既定の方針の正しさを再確認するものであり、インスピレーションを受けるという性質のものではなかったはずである。

影響関係を検討するときに、直接的な影響が証明できないのは非常にもどかしい。いっそ完全に否定的な結論が導かれる方が歴史認識としては意味があるといえよう。しかしクローデルと薩摩治郎八の関係については、残念ながら両者の出会いの日時、場所、面談の内容等に関する資料は一切なく、影響関係については状況を考慮した上での薩摩治郎八の心理の忖度にとどまらざるをえなかった。フランス側の外交史料を精査して、前記クローデルの「報告書」で言及される1924年12月23日付のモランの「書簡」とクローデル自身の「書簡12号」（1926年3月）が発見さ

れば、両者の関係はより明確に把握できると思われるが、それには今後のより徹底した検証を俟たねばならない。

また薩摩家と大学都市日本館創設に関しても、これまでの調査では、薩摩家が資金負担を引き受けるに至った過程を証明、説明する決定的な文書は見つかっていない。おそらく外交文書の調査にはおのずから限界があるのだろう。薩摩治郎八は行動の記録を自分で丹念につづるタイプの人物ではなさそうだから、仮に大正末から昭和の始めの時期の『松岡新一郎日記』『廣田弘毅日記』のようなものが存在して、これを参照できれば、さまざまなことが一気に解明できるだろう。さらなる調査が望まれる所以である。しかしながらこれまでの考察で、外務省、在仏日本大使館、パリ大学において、この時期どのような動きがあったかは、ある程度跡づけられたと思う。とりあえずここまでの検証を中間報告としてまとめておくが、最後にフランス外務省資料室での調査の過程での小さな発見を付け加えておきたい。

朝日新聞社の貢献？

AMAE に保存されている前記クロードルの「報告書」と同じマイクロフィルムのリール583-1は1924年4月から1929年12月までの外交文書を収めたものだが、その157番に1928年10月3日付で、在日フランス大使 R. ド・ビイ R. de Billy から本国の外務大臣に宛てた報告がある。本文を引用してみよう。

「朝日新聞社から問い合わせがあり、同社がパリ日佛會館 [Maison Franco-japonaise] に、美術資料とヨーロッパの言語で出版された日本関連の作品で構成される図書室を寄贈するための募金を行なうことに異議はないか、とのことでした。

朝日の意図は、パリ日佛會館定礎式に臨席された朝鮮の李殿下に名誉総裁就任をお願いすることであり、また同じく募金をフランス大使後援の形で行なうことを願っていると思われます。

この申し出に対して、当方としてはそうした発議に対して朝日新聞社にただ感謝するのみであり、フランス側の名誉総裁の役を謹んでお引き受けする、と返答してあります。同紙はまた安達氏 [駐仏日本大使] にもこの件を伝えております」

1928年（昭和3年）10月は日本館開館を7ヶ月後に控えた時期である。現在の日本館は、大学都市内でも数少ない、本格的な図書室を有する館のひとつなのだが、蔵書の起源は朝日新聞社の募金によるものなのだろうか。同社の戦前のこの種の企画については紙面データベースによるしかないとのことと検索を試みたのだが、ヒットするものはない。企画は幻に終わったのだろうか。しかし丹念に見ていくと、関連がありそうなものとして1931年（昭和6年）4月3日朝刊の広告というか社告に、次のような記載の見られるのが目に付いた。すなわち「ジルマルシェックス氏／ピアノ獨奏會／四月七日（火）午後七時 本社講堂／會費一圓、二圓」という演奏会の告知である。奏者がアンリ・ジル＝マルシェックスとなると、それだけで薩摩治郎八との関係が気になるが、この時期治郎八はフランスにいたので、1925年とはかなり事情が異なるのは明らかだが、

しかし大学都市日本館とは無関係ではない。告知には続けて「日佛文化交流の使命を帯びて來朝したジルマルシエックス氏の意思によりこの演奏會の収入は擧げて圖書を購入し、本社の手を通じてパリ日本學生會館に贈ります」とある。主催者たる朝日新聞社ではなく演奏者ジル＝マルシエックスの希望により、大学都市日本館への寄付という趣旨で開かれる演奏会ならば、そこに薩摩治郎八の何らかの意思がはたっている可能性は小さくない。少なくとも治郎八の知らないところでこのような催しが行なわれるとは考えにくいのである。

朝日新聞の記事データベースで見ると、演奏会の収益の使途を確認することはできないが、日本館図書室には戦前の『國華』がまとまって収蔵されていることなどを考えると、朝日新聞社が同館図書室の蔵書充実に貢献した可能性はかなり大きいと思われる。

註

- 1) 大正10年頃から昭和初年までの大学都市日本館設立に関わる外交文書のうち、本稿で参照したものはすべて「文化交流関係雑件／日仏関係ノ部 第一巻」にまとめられている。これらの文書はいったんマイクロフィルム化され、その後画像ファイルとして国立公文書館アジア歴史資料センターのウェブ・サイトで公開されている。この画像ファイルは数十枚単位で一つのファイルを構成し、それぞれにB03040782800のようなレファレンスコードが付されているが、もともとなったマイクロフィルム自体は1-0216というリール1巻に収められたもので、画面ごとに4桁の番号が付されている（ただしこの巻の文書は1000枚に満たないので、頭の0は無視しても問題は生じない）。文書の同定にはこの番号を用いるのが、文書名や日付よりも確実なので、以後「文化交流関係雑件／日仏関係ノ部 第一巻」の資料に言及する場合は最初に[025] [125-128]等の3桁の数字のみを記す。
- 2) [023-027]
- 3) [036] 石井菊次郎駐仏大使から内田康哉外務大臣宛の電報第801號。重要な資料なので一部を引用する。
「la cité universitaire / 計画 (千九百二十年十二月五日「ル・タン」紙第四頁参照アリタシ) = 關シ最近「ソルボンヌ」総長「アッペル」氏ノ松田ヘノ談話ニ依レバ來ル六月三十一日 (ママ) ニハ Emile Deutch (ママ) 氏ト巴里市トノ間ニ一億法寄附ノ契約書愈々調印セラルベシ建設物ハ千九百二十三年ニハ竣成スベク加奈陀英國等モ其一部ニ自國大學生ヲ寄宿セシムルノ談モ進行中ノ由ニテ日本モ其一部ヲ利用スルコトハ大イニ可ナルベシト同総長ヨリ好意ヲ以テ勸奨セリ要スルニ佛國ニ於テハ戰後各國トノ智識ノ交換從テ事情ノ疎通ヲ期スルト同時ニ所謂佛國文化ノ波及ニ依リテ世界平和維持ニ貢獻セムト努ムル一派ノ人士アリテ今回ノ日佛文化交流計画モ前掲ノ諸計画ト相俟テ單ニ日佛ノ親交ニ資スルノミナラズ日本ノ學術ノ進歩及日本ノ紹介其他ニ於テ裨益スルトコロ渺カラザルベシ (…)」
- 4) [013-018]
- 5) 黒田記念館のウェブ・サイトで公開されている『黒田清輝日記』を参照。
http://www.tobunken.go.jp/kuroda/archive/k_diary/japanese/1921/dy9210618x.html
- 6) [076] 大正十年八月三日 「懸案中ニ係ル巴里ニ於ケル本邦人留學生寄宿舎建設ニ關スル件」
- 7) [144-146] 「シテー、ユニヴェルシテール委員會議事報告」(1921年10月26日開催)
- 8) [169] 「(乙) Cité Universitaire ニ關スル件」
- 9) [177] 外交史料中に同紙の切り抜きが保存されている。
- 10) [233] 「巴里大學附屬シテー、ユニヴェルシテール内ニ建設セラルヘキ日本館設計圖送付ノ件」
- 11) [401] 大正14年9月12日松嶋臨時代理大使から幣原外務大臣への電報333号。
- 12) [384]
- 13) 薩摩治郎八の動静については、徳島県立美術館編「薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち」展カタログ(1998)の江川佳秀編「年譜－薩摩治郎八」(pp.227-231)を参照。以下同様。
- 14) [470]
- 15) [489]

- 16) [488]
- 17) [578-582]
- 18) [590-591]
- 19) 薩摩 治郎八「わが半生の夢」,『せ・し・ぼん』(山文社, 1991) 25頁。
- 20) 中條忍「ポール・クローデルと日仏会館設立をめぐる」,『日仏文化』N° 66, 2001年3月。
- 21) 神吉恵美「ジル＝マルシェックスのピアノ演奏会」徳島県立美術館編「薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち」展カタログ(1998)所収, 170-175頁, および小林茂「一九二五年の器楽的幻覚——アンリ・ジル＝マルシェックスの演奏旅行と梶井基次郎」『比較文学年誌』第41号, 早稲田大学比較文学研究室(2005)所収, 一一二六頁, 参照。
- 22) [484] 1926年(大正15年)4月15日付, 廣田歐米局長から薩摩治郎八宛の公信案欄外に「薩摩治郎八氏入営中ニテ(…)」の手書きの書き込みが見られる。未見であるが, 小林茂早稲田大学教授の御教示によれば, 遺品の中にその感状もあるとのこと。

付記:

本稿は平成17-19年度科学研究費一般研究 A「両大戦間の在パリ日本人群像とフランス・モダニズムの展開」の中間報告である。2005年9月にパリ国際大学都市本部資料庫で, また2006年9月にフランス外務省外交資料室とパリ国際大学都市日本館で行なった調査の成果の一部を盛り込むことができたが, これは関係各位の御協力の賜物である。とりわけ2005年は当時日本館館長であった牛場曉彦慶應大学教授と大学都市本部のJaroslava BITU-PERUNKOVA 夫人, 2006年は日本館現館長永見文雄中央大学教授のお世話になった。また朝日新聞のデータベース検索に関しては, 朝日新聞社出版本部の大塚芳正氏と白百合女子大学図書館の浅岡邦雄氏のお手を煩わせた。さらに薩摩治郎八の生涯については細部にわたって小林茂早稲田大学教授から貴重な御教示をえた。そして本稿中のもっとも重要なクローデルの「報告」について, マイクロフィルムのプリントアウトのコピーを送ってくださり, 所在に関して重要な情報を教えてくださったのは中條忍青山学院名誉教授であった。ここでお名前をあげて, 各位に心からの感謝を申し上げる。

なお直接引用はしなかったが, 大学都市と薩摩治郎八について参照した資料は, フィクションをも含めて以下の通りである。

- Bertrand LEMOINE, *La Cité Internationale Universitaire de Paris*, Éditions Hervas, 1990.
- 加賀 乙彦『頭医者留学記』(毎日新聞社, 1983; 講談社文庫, 1988)
- 加藤 一『風に描く—自転車と絵画』(文藝春秋, 1987)
- 加藤 恕彦『加藤恕彦留学日記』(聖母文庫, 1998)
- 清岡 卓行『マロニエの花が言った』上下(新潮社, 1999)
- 小林 善彦『パリ日本館だより』(中公新書, 1979)
- 小山 俊子『パリ日本館』(もく馬社, 1983)
- 薩摩 治郎八『せ・し・ぼん』(山文社, 1991)
- 獅子 文六『但馬太郎治傳』(読売新聞連載, 1967; 新潮社, 1967; 講談社文芸文庫, 2000)
- 鈴木 康司『パリ日本館からボンジュール』(三修社, 1987)
- 瀬戸内 晴美『ゆきてかえらぬ』(文藝春秋社, 1969; 文庫, 1978)
- 新倉 俊一『ジュルダン大通り7番地』(三修社, 1986)
- ロベール・ブラジャック, 高井道夫訳『われらの戦前』『フレヌ獄中の手記』(叢書『1945: もうひとつのフランス』4所収, 国書刊行会, 1999)
- 特集「薩摩治郎八のせ・し・ぼん人生」(『芸術新潮』1998年12月号)